

### コロナ禍で思う宮沢賢治(3)

京都薬科大学 名誉教授 桜井 弘

宮沢賢治(1869～1933)よりも9年後に生まれたロマン派の歌人と謝野晶子(1878～1942)は、賢治と同様に多彩な生涯を過ごし、ともに東京の空の下でスペインインフルエンザ(スペイン風邪)を経験しています。晶子は11人の子供たちを生み育てる中、子どもたちの健康を心配しつつ、スペイン風邪の脅威について印象深い評論を残しています。賢治は、スペイン風邪に感染した妹トシの病状を父へ詳しく手紙で報告しながら、自らの予防対策法など、個人的な経験として語りましたが、晶子は個人的体験とともに社会的発言にまで発展させながら生と死について深く考察しています。同時代を共有したふたりのスペイン風邪へのスタンスの取り方に興味が湧いてきます。与謝野晶子の生涯とスペイン風邪を少し振り返り、晶子の発信した言葉を紹介します。

#### 与謝野晶子の簡単なプロフィール

1878(明治11)年12月に、大阪府堺市にある和菓子店・駿河屋の三女として生まれた与謝野晶子(鳳 志やう)は、10代の初めから、店を手伝いながら古典、歴史書に親しみ、堺女学校卒業後は文芸誌に詩や短歌を投稿していました。『明星』に短歌を発表した後、与謝野寛(与謝野鉄幹)に出会い刺激され、初めて歌集『みだれ髪』を刊行して注目を浴びました。1901年(23歳)に東京へ移り、寛と結婚し、『明星』の中心となり小説、詩、評論、古典研究など幅広い活動をするようになりました。二十数冊もの歌集を発表しています。寛の死後は、叙情的表現に独自の境を開きました。評論活動も積極的に行い、その関心は社会的視野に広がり婦人問題にも注がれました。

新詩社の会では『源氏物語』の講義を続け、現代語訳を3回発表し、『和泉式部日記』などの現代語訳や研究も行いました。日露戦争従軍中の弟を思う詩『君死にたまふことなかれ』(1904年)は、国語の教科書などでも広く知られています。また、文化学院創立にあたって初代学監に就任するなど、教育活動にも熱心で、文学を通して幅広い活動をしました。1942(昭和17)年5月に亡くなりました。

#### スペインインフルエンザ(スペイン風邪)

インフルエンザ・パンデミックに関する記録は1800年代ころから残されていますが、パンデミックの発生の詳しい記録が残されているのは1900年ころからです。20世紀以後は、1918～20年、1957～58年、1968～69年に流行した3回のパ

ンデミックが記録されています。それぞれ、スペインインフルエンザ(原因ウイルスはA/H1N1亜型)、アジアインフルエンザ(A/H2N2亜型)、香港インフルエンザ(A/H3N2亜型)とよばれています。これらの中で、スペインインフルエンザ(スペイン風邪)について簡単に紹介します。

第一次世界大戦中の1918年に始まったスペイン風邪は、世界的に大きな被害をもたらしました。推定されている結果によると、感染者数は世界人口の25～30%、もしくは世界人口の3分の1の6億人、致死率は2.5%以上、死亡者数は全世界で4,000～5,000万人と考えられています。日本の統計では、約2,300万人の感染者数と約38万人の死亡者数が報告されています。

スペイン風邪の第一波は1918年の3月に米国とヨーロッパで始まりました。第1波の感染性は高いものでしたが、致死率はそれほど高いものではありませんでした。1918年の晩秋からフランス、米国などで始まった第2波の致死率は第1波の10倍となり、15～35歳の健康な若年者層で高く、99%が65歳以下の年齢層でありました。さらに1919年早々から第3波が起こりました。

スペイン風邪は、広範な出血を伴う一次性のウイルス性肺炎を引き起こしました。重症でかつ短期間に死に至るため、はじめはインフルエンザとは考えられず、脳脊髄膜炎あるいは黒死病(ペスト)の再来かと疑われたようです。当時はまだ治療薬は発見されてなく、ワクチンもありませんでした。インフルエンザウイルスが初めて分離されたのは、約10年後の1933年でした。したがって、予防対策に重点がおかれ、患者の隔離、人々の行動制限、個人衛生管理、消毒と集会の延期中止などが求められました。マスクを着用し、一部の学校を含む公共施設は閉鎖され、集会は禁止されましたが、感染者数を減らすことはできませんでした。

わが国では、世界の流行から少し遅れて、第1波は1918年5月～7月、第2波は1918年10月～1919年5月頃まで、そして第3波は1919年12月～1920年5月頃までと考えられています。

### 与謝野晶子のスペイン風邪への発信

このような状況下で、晶子が社会的に発信した文章を紹介します。晶子は、『横浜貿易新報』に1918年11月10日、1920年1月25日、1920年10月31日そして1923年2月21日の4回寄稿しました。晶子は、1917年(40歳)までに10人の子供を授かり、スペイン風邪のさなかの1919年に最後の女の子を生みました。スペイン風邪の第1波が猛威を振るう中で書かれた第1回の寄稿では、不安な日々と怒りとを綴っています。また、解熱剤を多くの人々へ安く提供してほしいと提案もしています。

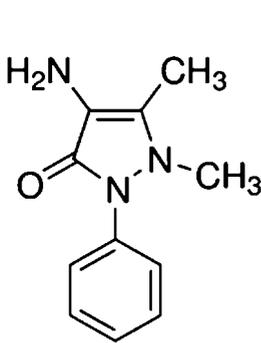
「今度の風邪は世界全体に流行<sup>は</sup>って居<sup>や</sup>るのだと云います。風邪までが交通機関の

発達に伴って世界的になりました。この風邪の伝染性の急劇なには実に驚かれます。私の宅などでも一人の子どもが小学から伝染して来ると、家内全体が順々に伝染して仕舞いました。唯だ此夏備前の海岸へ行って居た二人の男の子だけがまだ今日まで煩わずに居るのは、海水浴の効験がこんなに著しいものかと感心されます。東京でも大阪でもこの風邪から急性肺炎を起こして死ぬ人の多いのは、新聞に死亡広告が殖えたのでも想像することが出来ます。文壇から俄に島村抱月さんを亡ったのも、この風邪の与えた大きな損害の一つです。」

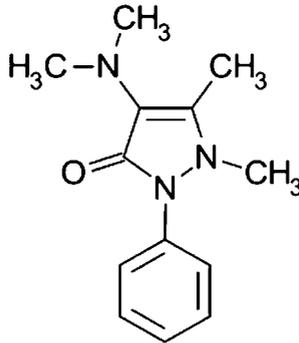
「政府はなぜ逸早くこの危険を防止する為に、大呉服店、学校、興行物、大工場、大展览会等、多くの人間の密集する場所の一時的休業を命じなかったのでしょうか。そのくせ警視庁の衛生係は新聞を介して、成るべくこの際多人数の集まる場所へ行かぬがよいと警告し、学校医もまた同様の事を子供達に注意して居るのです。社会的施設に統一と徹底との欠けて居る為に、国民はどんなに多くの避らるべき、禍を避けずに居るか知れません。」

「今度の風邪は高度の熱を起しやすく、熱を放任しておくとなら肺炎をも誘発しますから、解熱剤を服して熱の進行を頓挫させる必要があると云います。然るに大抵の町医師は薬価の関係から、最上の解熱剤であるミグレンを初めピラミドンをも吞ませません。胃を害しやすい和製のアスピリンを投薬するのが関の山です。一般の下層階級にあつては売薬の解熱剤をもって間に合わせて居ります。こういう状態ですから患者も早く癒らず、風邪の流行も一層烈しいのでは無いでしょうか。官公私の衛生機関と富豪とが協力して、ミグレンとピラミドンの中流以下の患者に廉売するような応急手段が、米の廉売と同じ意味から行われたら宜しかろうと思ひます。」(『感冒の床から』1918年11月10日)

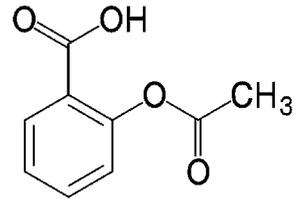
ミグレン、ピラミドンおよびアスピリンは、次のような化学構造式をしています。ミグレンは、古くからある鎮痛処方、ピリン系鎮痛薬のアンチピリン、鎮痛効果を高めるカフェインとクエン酸が90:9:1の割合で配合されています。切れ味のよい作用がありますが、アレルギーや血液への副作用がしやすいのが欠点であり、最近では使われません。ピラミドンは、アミノピリンとしてよく知られ、鎮痛、抗炎症、解熱作用を持っています。アミノピリンの効力はアンチピリンの約3倍、鎮痛作用はアンチピリンより強いのですが、吐き気、頻脈、ヘマトポルフィリン尿症や無顆粒細胞症などの副作用を起こすことがあるため、現在では用いられていません。アスピリンは歴史の古い薬で、解熱鎮痛薬や抗炎症薬として長年使われ、今でも用いられています。化学構造的にはサリチル酸の系統に分類されます。名前に“ピリン”が付きますが、いわゆるピリン系の解熱薬ではありません。近年、抗血小板作用により血管内で血液が固まるのを防ぐ効果が知られています。



ミグレニン(アンチピリン)



ピラミドン(アミノピリン)



アスピリン

スペイン風邪の第2波の只中に書かれた評論では、“生と死と愛”について内省的、宗教的、哲学的な思索に入ります。

「悪性の感冒が近頃のように劇しく流行して、健康であった人が発病後五日や七日で亡くなるのを見ると、平正唯だ『如何に生くべきか』という意識を先にして日を送って居る私達も、仏教信者のように無常を感じて、俄かに死の恐怖を意識しないで居られませんか。」

「今は死が私達を包圍して居ます。東京と横浜とだけでも日毎に四百人の死者を出して居ます。明日は私達はその不幸な番に当たるかも知れませんが、私達は飽迄も『生』の旗を押立てながら、この不自然な死に対して自己を衛ることに聡明でありたいと思います。」

「私は家族と共に幾回も予防注射を実行し、そのほか常に含嗽薬を用い、また子供達の或者には学校を休ませる等、私たちの境遇で出来るだけの方法を試みて居ます。こうした上で病気に罹って死ぬならば、幾分それまでの運命と諦めることが出来るでしょう。(中略)死に対する人間の弱さが今更の如くに思われます。人間の威張り得るのは『生』の世界においてだけの事です。私は近年の産褥に於て死を怖れた時も、今日の流行感冒に就ても、自分一個のためと云うよりは、子供達の扶養のために余計に生の欲望が深まって居ることを実感して、人間は親となると否とで生の愛執の密度または色合いに相異のある事を思わずに居られませんか。人間の愛が自己という個体の愛に止まって居る間は、単純で且つ幾分か無責任を免れませんが、子孫の愛より引いて全人類の愛に及ぶので、愛が複雑になると共に社会連帯の責任を生じて来るのだと思います。感冒の流行期が早く過ぎて、各人が昨今のような肉体の不安無しに思想し労働し得ることを祈ります。」(『死の恐怖』1920年1月25日)

第3波が峠を越したころ、当時は終息に向かっているかどうか分ならず、寒さに向う季節となり、うがいの重要性、ワクチンのこと、友人の医師が作った予防注射の有効性を紹介するとともに、科学への過信を戒めるような心の在り方を書いています。「また恐ろしい流行感冒の人喰鬼が目を覚ます季節となりました。(中略)目前に迫っての予防は、風邪に罹らないことの用心が一つ、併せて、日に幾度も塩水や他のもので含嗽をして病毒素の附着を洗い去ることが一つであろうと思います。」

「私の家庭では、昨年以來一つの予防注射をして居ます。ワクチンの注射の無効は専門家の間に殆ど決定して居るようですが、私達の実験して居る注射液は、友人近江ドクトルの考案されたもので、社会にはまだ知られて居ませんが、今日までの実験で、近江さんの友人である、私達の間には、その有効性が証明されて居るのです。この注射のために昨年も此春も近江病院では一人の流行感冒患者を出しませんでした。(中略)併し其れは偶然の僥倖であったのかも知れませんが、私達は今日までの所全く注射の効力であると信じて居ます。(中略)卅八九度の熱があつても、一回乃至二回の注射で熱が下がり、屹度二日ほどで回復して仕舞います。私はこう云う予防液のあることを御参考までに書いて置きます。近江氏は(中略)三四年前に偶然にこの注射液を発見されたのです。」

「注射液のことなどを書く、私と云う者が全く科学を信仰して居る人間のようにみえるでしょうが、私は科学に対する絶対の信者ではありません。科学の実力はまだ浅薄な程度にあると思ひ、唯だ其中の或物は信用して好いと思つて居ます。(『治療と衛生』1920年10月31日)

晶子は、ワクチンは無効、すなわちまだインフルエンザワクチンは見出されていないと書いています。ワクチンという名称は、ラテン語のVacca(ワッカ = 雌牛)に由来しています。世界初のワクチンである天然痘ワクチンは、イギリスの医学者、エドワード・ジェンナーにより1796年に雌牛から取られたため、ジェンナーによってこの名前が付けられました。

近江ドクトルという名前が出てきましたが、この方は順天堂医院の近江湖雄三医師ではないかと想像されます。近江医師は、ドイツから持ち帰った最新式の分娩法、無痛分娩をとり入れていたそうです。晶子は近江医師の施術により、麻酔を使用して出産した経緯を持っていましたので、その後も近江医師のお世話になっていたようです。近江ドクトルが作られた注射液については、詳しいことは分かっていないようです。今回の新型コロナウイルス感染の拡大の問題でも科学的判断は必要だとしばしば議論されてきましたが、100年前は現在ほど科学や医学が進歩していなかったにも関わらず、科学的現象を素直に見る晶子の考え方にはやはり鋭いものを感じます。

最後の寄稿では、スペイン風邪の流行とともに多くの人々が亡くなった状況をきち

んと捉えて、死への心の向き方を考え、子供たちへのいたわりの強い心構えを高らかに述べています。共感しない人はいないと思われます。

「我我凡人は不安や危険に脅かされる場合が多い。(中略)我々の境遇で、殊に私のような壮年期にある者で、折折突如として感じるのは死への恐怖である。(中略)生と死とが私達の前に対立して、生が喜びであり、死は脅威である。私達に於て生を強調する心が盛なれば盛なる程、私達は死を回避し憎悪する心が深い。死を鴻毛より軽く思うことは、私達の能くしないところである。」

「新聞を見ると、此春は死者の記事が頻りに目につく。医師に聞くと感冒が流行している相である。現に私の家で子供達が次々に咳をして発熱している。併し新聞で見る死者には高齢の人が多いうだと思って慰めていると、伯林に留学している良人の甥が突然肺炎で亡くなったと云う電報が、文部省を経て親族の間に伝えられた。(中略)やっと三十を超したに過ぎない篤学の青年がこうして亡くなるのを思うと、今更の如く人間の肉体の脆さが痛難される。現に感冒で寝ている子供達の上にも、どんな急変が起こるかも知れないと思う。そして、その私の子供達の扶養の全責任が親二人の肩に掛かっている事を片時も忘れずにいる私は、自分もまた容易に死なれない身だと云うことを、また何時ものように痛感して、他人の死の報道が我上に切迫する死の前兆であるかの如くに戦慄される。(中略)併し死に脅かされて滅入った心の下から、また不思議にそれに対抗しようとする勇気が湧き出して来る。私は死なれない。何としても生きなければならない。今の私は狭義の私自身のために死を怖れるのでは決して無い。私の命の大部分には私の十一人の子供が入っている。私の死は其等の子供の命を危くすることだ。子供達が細細ながらもせよ一人一人独立される見込のつくまでは、私は扶養者として生きなければならない。」(『死の脅威』1923年2月12日)

これを読むと、第2回で紹介しました志賀直哉の小説『流行感冒』の中で、「私」のわが子と思う気持ちが彷彿と思い出されます。与謝野晶子は、スペイン風邪の流行を契機として、周囲の状況をよく観察して、怒りを表し、外部の状況に対して人々に訴えつつ、「無常」を感じ「死の脅威」に迫られていきましたが、「死」の怯えの中で11人の子どもたちの生への全責任と愛を痛感して「何としても生きなければならない。」と力強く宣言しています。さらに、日常性がいかに豊かなものであるかを伝えてくれています。一つの流行病に対して、現代の私達にこれほど感動と勇気を与えてくれる宣言はかつてなかったのではないかと思います。